
女装天女！

フィサリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女装天女！

【Zコード】

Z5587Y

【作者名】

フィサリア

【あらすじ】

「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨!」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップステイックアクションコメディ。

FC2小説に掲載しているものです。

長編ですので、どうか気楽にゆっくりとお楽しみください。

一 代目

全身が樂にうつる大きな鏡の前に洋一は立つた。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。

そしてウイッグ。

それらは全て女物だ。

「ゴクリ」とのどが鳴った。

「…………今なら引き返せる、やめろ、やめるんだ！」

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

「…………なんでヤクザの俺がこんな」と…………

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まつた。

彼は幽姫洋一^{よひめあきひやういち}30歳。

この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その「代田」と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがつて、銀河鉄道の某美人もうつむいて泣き崩れるといわれるくらいい美しい眼と身体をした、母・凜にそっくりだった。

そのせいでもたらとモテた。女性はもちろん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。

鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期「代田」と言われるようになっていた。持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これから彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るという組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代田、いくわいさんっス！」
「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行つても町にひきしむ。

道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。

洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。

盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。

照明に照らされたアーケードの中は、人づきひとづおりあり、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。

洋一のなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。

・ · · · やつと独りになれた · · · ·

さつきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をつるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。
· · · · · じつしてこうなつちやつたのかなあ · · · · ·
うつむいて歩きながら、独りになるといつも考へることをまた心中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても纖細で華奢な心の持ち主だった。

学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。
おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。

むらがる女子たちに対応していくうちに、無類の女づたらしと尊

されるようになり、いやらしい田で言い寄つてくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになった。全てはふりかかつてくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつかえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巖を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたくつたような父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。

-----イヤだ！絶対にあいつみたいになりたくない！
しかし、彼はヤクザである。

同類、それも組織経営なら親をもしのぐと言っていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈つてある髪-----本当は綺麗で細く明るい栗色の髪だった-----をガリガリといた。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い浮かべる。

-----ああ、かあさんはやつぱすこいなあ、カンペキだ-----
・ なんであいつなんかと結婚したんだりう

ここで彼の為に断つておぐが、洋一はいわゆる世間でこいつマザコンではない。

母である凛は、女性と言ひ偶像を極めた存在ではあったが、立派な社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精神的に近づけたりはしなかつた。

だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粹に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持ちでもつて、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがつた年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だつたと思つていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。緯度、軽度共にまったくちがつていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならぬ。まあ実際の話、生きていくのは楽勝ができるのだが、幸せとは程遠いクラيمな世界でこれからもやつしていくのかと考へると、気がどんどん滅入つてくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。ただ行き詰まり感だけがあつた。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとつぐの昔に済ませてあるし、だいたい30でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

-----どうしてこうなつちゃつたかなあ-----
結局、この問い合わせつてくるという無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったのでもともとぶつかってしまった。

急に自分の懷に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいものを着ていた。女の子のようだった。

突つ込まれたわき腹が痛かつたが、ヤクザモードでなこときの彼は優しい。

どなりもせず、彼女の肩をそつとつかむと、「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「「めんなさい、すみません！」

彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去つていった。

あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のするどい頭脳はすでに「さ」き始めていた。

あれ・・・なんか声低くなかったか？　それに肩もえらぐがっしりとしてたよくな・・・・・

5秒で答えは出た。

- - - - あつ！ 男！？

正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきてるという、女装の男、女装子といふのに当たつたらしい。

夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一にぶつかってしまったようだ。

めざりしこものを見た氣分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸・・・・・いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

- - - - なんだ？

思わず足を止めてしまつと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

- - - - ビ、どうしたってこりゃんだ、俺！？

訳がわからず田を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中でも、存在を誇示するよつにチャラッとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのエントランスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上ると、扉を開けて部屋に入る。玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいたずらにパツとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそつと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこでもある小洒落た部屋だった。

これまでここへ何度もやってきていた。

別に母を偲ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りつきりになれる場所だったからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろつた寝室が映し出された。母・凜はすべてを置いて、この部屋を出て行ったのだった。

理由は知らない。

実は大雑把で豪快なところがある凜なので、面倒で身一つで去ったのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になつて鏡の前に立つてしまつたのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。

自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかつた。

あの女装子に突き当たつてから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまつたからだ。

ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はっきりとわかっていた。

とまどつてているのは、それを認めたくないだけなのだ。

その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

す一つと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畠だった。

洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンッと跳ね上がった。

そして視線が己の股間へと向けられる。

そこにあるよつ洋一自身 - - - - 彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいた - - - - は、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかつた。

- - - - なんだ？ 僕は心の病なのか！？

そうでもあるし、ないともいえよう。

とまじう心とは別に手は着々とまたうき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。そして絶対に合ひ訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に田は、さきほどの女装子が着ていたよつなメイド服を探している。

しかもあるはずがないそれが、なぜかあった。

・ · · · · か、かあさん · · · · あなたっていう人は · · · ·

息子の将来を見通していたかのようなチョイスであった。

遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまつたが、それはまったくの方向違ひだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そつとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらいの偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウイッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した己の姿を洋一は、張り裂けそつなくらい鼓動している胸を押えながら、鏡に映してみた。

化粧をしていないのでさすがに違和感があつたが、意外と見苦しくない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさない身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被つてきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

しばらくそうして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、田を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

- - - - ああ・・・・ もうそのくらいにしてえ・・・・・・
そう胸中で叫んだが、再び火がついた心は許してはくれない。

とこりうか、すでに語尾が女性化している。

高校時代に、ビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリヤリやらせていたので、化粧方法がわかつていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もしつかり残していくつてくれていたので、あつという間に顔ができるが。

「あつ！」

自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。

双子とはちょっとと言ひすぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。

さつきまであった、ウイッグや服とのズレがかなりなくなつてきてる。

これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになつて初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗つてアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちりと大きく広がつて見え、つけまつ毛など必要ない。

しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらないくらいだ。

元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーティ一つ一つをうまく演出している。

とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているよう、「元気を放つていた。

「あ・・・・・・」

ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に氣を失つてあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクス的転換に耐え切れなくなつたようだつた。だが数秒でガバッと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声がしていたが、洋一は夢中で気がつかなかつた。

シン

「おはよおひるやれこめすー。」

「いじへんのひなつスー。」

事務所にはいると、ドスの効いた声や妙に甲高い声の合図が洋一を迎えた。

無言で挨拶を受けながら、個室となつている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかとドスクに陣取った。

結局あのあと、コミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。

そしてベッドに倒れこんでわいつままで寝ていたのだが、身体がまだだるい。

一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。

一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやつてきたが、すべに帰るつもりだった。

一時間ほどいじで時間をつぶしてから出でたかったりで、また恥骨の辺りがソワソワしそじめた。

うつと思わずつめき声が出て、洋一はあわてて口元をやる。

・・・・・　一晩だけって約束だったのに・・・・・　なんでもまたあそこへこじりつとしてるんだ、俺？

いつたい誰にそんな約束事をしたといつのだろ？。

しかもこのセリフの40%ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗があおつたとき、ドアがコンコンと控えめにノックされた。

瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいれ！」

「失礼します」

組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。

洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・冴島 心さくじまだつた。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」

そういうつて冴島は、馥郁な香り漂うカップを、首も立てずに洋一の目の前に置いた。

「おっ、ありがとよ」

こう答えてカップに手をのばすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。

「……うまい…………やつぱシンの淹れてくれた紅茶は一味ちがう

目を閉じてそう洋一は思った。

シン。

二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。

そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。

急いでまた断つておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。

今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。いくら言つてもみんな自分のことを「一代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を口く淹没してくれなかつたが、シンは違つ。

それに言葉遣いも丁寧で優しく、不必要に語尾のあたりに、ツとかスをつけないところも気に入っている。

つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていない男。

それがシンだった。

ちらりと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のよつてに謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立つている。そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サッとすぐこ一歩で前に出てこれるという絶妙なポジションだ。

近いのに主の田の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。いつたいこの男はどうじで、こんな技術を学んだといつのだろ？

洋一がカップをソーサーに戻すと、すつと新聞が置かれる。

左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。

だが、シンは火をつけはしない。

洋一が自分でつけることを好むからだ。

新聞から田を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。

そこには必ず灰皿があるからだ。

おまえはドラえもんか、と突っ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。

そう、それが沢島 心であった。

「シン、おまえうちに入つて何年になった？」
今日も満足して、洋一は優しくそういうた。

「三年になります、兄貴」

はつきりとはしているが、ドスを控えた慄懾な声でシンがこたえる。
「やうか・・・・・ ずいぶんともつ見習いも長いな
シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクッと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げてくる。

博打を経営させれば、まつといつなギャンブルにしてしまって、利益が上がらない。

かといって女をだますことなどできつてないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしこととこえば、ずっとやつてきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるところことができない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やっぱリボディガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではなくても生きていけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおう、そう彼は決めていたが、シンがいなくなつた後のことを思つて、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考え方を見透かしたように、シンが心のこもつた声でいう。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「・・・・・すまんな」

「いえ、それが本心ですか・・・・・」

ええやつちやなあワレ、と二セ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行つた。

ふーっと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんないよ。シンには似合わないよ

な・・・・・「

小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。

本皮を張った椅子が、キュッと小気味よい音をたてて、彼を包み込

んだ。

彼女たち

ジワリリワーンー・ジワリリワーンー！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃーん、今夜ヒマあ？」

「おお、あ・・・・・」

空いていると直すとしたとき、ちりつと母の部屋が脳裏をかすめ、ロゴもある。

「あーあああ・・・・・あかんわ、仕事やねん」

「ちょっと！ その、あーの間と関西弁はなんなのよ」

甘つたるかつた真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さつきテレビで観た芸人のしゃべりがひつひつやつて

「・・・・・なんかあやしいね。洋ちゃんテレビきらじゃん」

もつと声が低くなつた。

バカで能天気なキャラ嬢なのに、いつもカンはなぜすぐ働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの人とかじゃないでしょ？」

「バツカ、ちげーよ。なんでそうなるわけ？」

「だつて、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわった気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼッタイかわった！ 好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わったというところは的を得ている。洋一自身は決して認めないだろうが。

「…………今から洋一ちゃんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

「ひ

うつ、とつめき声がでそうになつて、洋一はあわててケータイを遠ざけた。

顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畠の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもつたことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。

なので、ゼヒとも今は会こななかつた。

…………や、ヤバい！ 部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっとこなきゃいけなくなる

そうなると、もうこひら側へは一度と戻つてこれない気がして、洋一はぞくつとした。

それにつまでもシンの送迎を断るわけにこかないから、マンションの存在も組にバレてしまう。まだ初秋だというのに、まるでサウナに入つてこむよつに汗がドップと吹き出てシャツを張り付かせた。

「あははは。まったくなにいつてんだよ、おまえ。ひごーつてば力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰つて真子の誤解をとこうか。

しかし、妙にカンだけはいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまふかもしない。

そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ ちょい仕事まで時間あつから、今から会おうが

「…………」

「なんだよ、まだうたがつてんの？ しょがねえなあ……じゅ、じゅ、

「…………今から洋一の耳に、殺氣が送り込まれた。

これから信じられるようにしてやるよ」「み

これから……の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータ

イに吹き込んだ。

力技で行く気だ。

真子は野生児だけにエッチが好きだった。

「あ・・・じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」「

真子の声が一瞬で甘いものに戻った。

成功である。

洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。

「おお、早くここよ。あと、シャワーは浴びずに、な

「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」

エッチはてめえだろうが、と心の中で突っ込んでおいてから、洋一は一言二言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょつか？」

急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒックと悲鳴をあげて飛びのいた。

「申し訳ありません……おどろかせてしまつて」

「し、シン……おまえ気配消しそぎだつて！」

「失礼しました。お電話の邪魔かと思つて控えておりましたので」シンはそういうて軽く頭をさげた。どことなくいつもより懇懃無礼な感じがした。

その仕草をみて洋一はハツとした。

-----ここに、電話の相手が真子っことも、その内容もわかつてやがる――

そう気がつくと、わすがに氣味が悪くなつた。

「車を回してきますから、少しあ待ちください」

くるりと優雅にターンして、足早に去つてゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きっとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そういう真剣に思つのだつた。

洋一のテクニックをもつてしても、真子を納得させるのに3時間もかかつてしまつた。

セックスは嫌いではなかつたが、同年代の男より数多くこなしてきてし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなつていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふうーっと息を天井へと吹きあげた。

「兄貴、どちらまで？」

ハンドルを握つて、まっすぐに背を伸ばして座つていたシンが、そつたずねてくる。

洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になつたまま真子が言つたセリフがよみがえる。

「今夜、洋ちゃんとい泊まる。しばらく部屋にいるから」

彼女がそう言つたといつことば、洋一の作戦はミッショーンコンプとはいつていないらし。

今夜部屋に戻らなかつたら、真子は更に疑いをつのらせんだ。

彼女一筋、と言つわけではまつたくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだつた。

まあ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせきてしているのだが。

いつも悪気の無い加害者と言つてのタチのよくない男は、さらに考

える。

・・・・・ そもそもなんで俺は、自分の部屋に帰りたくないって
イライラしてんだ?

答えはすでにでている。

目をそらせたい事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。
もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨の
あたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「・・・・・ 兄貴? どうかなさいましたか?」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然
とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出でている一つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

・・・・・ 兄貴、真子さんとにかくあったのですが・・・・・

あんなに苦しそうなお顔になってしまわれて

洋一の搖れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを
聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じつと耐えて待つた。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれれば良き妻、そ
して良き母として立派であつただる。だが現実は、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝つて、毅然と顔を上げて命令した。

「シン、部屋に帰る。車を出せ」

「わかりました」

車体を沈みこませず、するりとジャガーよすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」

洋一の住むマンションの駐車場でジャガーが止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。

「なんだ、妙な野郎でもいるのか？」

ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。ヒットマンなどいるはずもなかつたが、いちおう職業柄そういうてみた。

だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたかっただけである。

シンは何もこたえず、自分の脣に人差し指を立てて洋一に黙つているようにジースチュアすると、さつとジャガーを降りて猫のように階段へと消えてしまった。

いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰つて洋一にさせやいた。

「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争つてます。どうやら鉢合わせしてしまったようで。いま上がられると不測の事態になるかと思いますので、いじめ離れまじょう」

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のNO1ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。

「あいつは物分りはいいが、浮氣は許さないやつだ。血の雨が降る……」

「どうしましょう。水音さまのところでもまいりましょうか?」
大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。
「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねえ」

「…………たすがです、兄貴」

彼女同士を激突させておいて、たすがもなにもないはずなのに、シンはそういって洋一をほめた。

「それではどこか部屋でもとつましょうか?」

そういって洋一の顔を見たシンが、あつとおどろいた。

「…………あ、兄貴が笑つてらっしゃる!」

洋一自身も気がついていなかつたし、またシン以外の者ではわからぬいくらいだつたが、微妙に彼は笑っていた。
あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなつて出てしまつたのだ。

おどろきを表情に出さぬよつに苦心しながら、シンは洋一の言葉を待つた。

「おまえはここで帰れ」

「はっ?」

「俺を降ろして帰れ」

「兄貴…………」

逃げずに一人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やつ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」「洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと言つと、きつちりゅうの礼をしてからジャガーに乗つて去つていった。

車が完全に視界から消えた後、さらに10分待つてから通りに出て確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去つた。

お散歩

その夜、母のマンションに来た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。

そして今夜は黒を基調に白いフプロンが強調された、本格英國風ハウスマейドであった。

……………母さん…………なぜあなたはこんな物を持つてたんですか？

10年前といえば、東京は秋葉原でよしやくメイドブームが隆盛し始めた頃だらう。

なのに凛はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどうで手に入れたといふのだらう。

自分の知らなかつた母の一面上洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。

だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上ビビりさせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

…………出稼え…………そのままの格好でお外を散歩しちゃえつ！

内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。
あの日から自分の中に魔性が宿つてしまつた、そう洋一は感じていた。

そいつが耳をふさごとも、目をつぶしても、ずっとそれをかけてくるのだ。

…………絶対にバれないってつ。夜だし、コスもメイクもカン

ペキだし！

なぜか内なる魔性の声は、うら若い女性の声であった。

それはさておき。

あくまで自分基準だつたが、割とよく似合つているのもまた事実。それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとじめようが無い。

理性と言うか細い手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバークウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけ一気に飲んだ。

そしてその瞬間に豪快に吐き出した。

洋一の口は、まるで農家のスプリンクラーによる、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。

「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」

あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。

それはアルコール度数9.6。と言つウォッカであった。
もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。

おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしてはいない。

すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。

洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あはははははっ」

女装の快感にアルコールの多幸感が加わって、彼はへラへラと笑い出す。

お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

-----この調子で酔いつぶれてしまえ！

メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、とつかえひつかえ飲み始めた。

バー・ボン、ラム、ウイスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。凛のアルコールギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そういうある内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がどう一ひと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がつてくる。そうなると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。

なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。

わずか一日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う・・うふふふ・・・・あははは」
よかれと思つてやつたアルコールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。

ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまつたのだ。

なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行つちやえーつ！」

心の中でつぶやいたつもりが声に出ていた。
もう完全に染まってしまっている。

「行つちやえーつ！」

内なる魔性の声も、言葉となつて口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪奢な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。

すらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。

お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。

洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。

繁華街から少しだけ離れた通りを、ぼくぼくと行くメイドさんが一人。

左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。

夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人づ子一人いないわけではない。

薄暗いネオンの下を、大手を振つて行進するメイドの姿は人目を惹いた。

ある者はヒューッと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおつと酒臭いため息をついた、

そんな人々の視線などお構いなしで、かつぽかつぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわあ、愉快だわあ、幸せだわあ」

まったく客觀性のない感想を口にしながら、にこにこと笑い続けて

いる。

そつやつて裏通りを歩くうち、「ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目に映った。

「おじいさん、これを差し上げましょう」笑顔で洋一は手に持っていたショリーを押し付けると、おどろく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。

「ダメですよー、そんなに大勢で蹴つたりしちゃ。加減しなさい、かげん」

「あア？ なんだよねえちゃん。ヤつちまうぞコラ!」

凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが碎けるイヤな音がした。

「うわあ！ なにこいつ！？」「ああ・・・見えた、黒いの・・・・・

残つていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。

「う、早い！ ・・・・」「おおつ！ 今度はヒラヒラが・・・・

その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まつていた会社員Aさん（45歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまったメイドさんを畠然とした顔で見ていたが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。

「メリメリつていつたねー、あの子の顔・・・うふふ

恐い事を可愛くいつてからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。

職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。

「ちょい待てよおまえ！ なにジロジロ見てんだよ」

振り返つて蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

「セフヒミーストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れる」とを阻止したらしい。

少し考えてから、ひょいと服の両袖をつまんだ。

一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が一本あらわれた。それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。並んで立つ少女たちの間を縫つて、真後ろにあつたバーのサインホールに刃物が突き立つ。

「こ、こいつなんかヤバい！」

笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーッと逃げ出した。

可愛く手を振つてそれを見送つてから、サインポールに刺さつた刃物を抜いて袖の中にしまつと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフーン　あはははっ」

楽しくって笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。

危険なメイドの洋一は、そう思しながら手を振つてトコトコと歩いてゆく。

その後姿を、路地裏を横切つていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。

走る車のライトで照らされて、さつきよりその姿がよく見える。

ひたすら破滅への道を行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られる」とへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いている内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗つた、地方にしか生息しない人たちが現れた。

ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を田に捉えた。

「あ、メイドがいるー」「うひょーーー！ロードレーサーのやねりつ」「おねーさーん！俺らと遊んで」

欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振つて答える。

その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起させた。

キーッとブレー キ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作つてやつてくる。

「メイドさーん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかつこいつで歩いてちや」

「やうそ、ヘンなことされちまつよー」

おまえらが今からやるんだろうが、と突つ込みたくななくらい分かりやすいセリフだ。

なのに、なんのことだかわからないといつ顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。

「あ、逃がすな！」

振り返つて追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止ると、道に止めてあつたバイクや車のキーを片つ端から抜いて、「えいつ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。

男たちは、えつ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになつて飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連續一発で三人を沈めると、ぐるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。

- - - - 残りは6人ねつ

だが心中のセリフは女性のままだ。

初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。

ちらつと振り返って、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すればやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。次の男は木刀を持っていた。

上から襲ってきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを頸にお見舞いする。

木刀があればもう無敵だった。

「あっはははは！」

甲高い声で笑いながら洋一が、うつと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がりてくる、電流のような気持よさに脳が麻痺した。

アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。

歩道には、いつの間にか何人もの野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドックン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。

それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。

- - - - あ・・・ なんかきそつ、これ・・・・・

その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーッ！ うちの事務所の前でなにをわいどんじや！」

叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが見えた。

- - - - あつ、シン！

その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。
逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。
木刀を投げ捨てるど、洋一はダーッと走つて野次馬の中に突っ込んだ。

「すっげえ！ メイドさん、カッコイイ！」「おねえちゃんやるなあ」

「顔見せて！」

見物人の中をうつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降りかかる。

- - - - ヤつべえ！ とんでもねえことしちまつた
男にすっかり戻つて深く後悔したが、すでに遅い。

スカートをひるがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかつたが、
今夜、彼は伝説の扉を開けてしまつていたのだつた。

「どこかで電話が鳴っている。」

「うるせー、誰か出ろよ早く！」

眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思つてつなるが、電話の音は止まらない。

「誰もいないのか？ 真子、綾乃、水音、出でくれ。」「…シン。おいシン、出ろ！…」

そこで飛び起きた。身体中が痛い。

どうやら床の上で寝てしまつたらしかった。

座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があつて、その中をのぞいた時、洋一はカツと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。

昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。

起き抜けだったが、頭はすばやく事態を把握していた。

ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」

爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえってきて、洋一は顔を真っ赤にした。

「…・・・兄貴？ 具合でも悪いんですか？ すぐに迎えに行きますから、今いる場所を…・・・」

「大丈夫だ、くるな！」

思わずそう叫んでしまってから、うつと言葉に詰まる。

いらぬことを口走つてしまつたと、死ぬほど後悔したがもう遅い。はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「…………わかりました。大丈夫です、誰にも言こませんから。で、新しい彼女のところですか？」

「ま、まあ そんなとこだ」

「では秘密にしておきますので場所を……」

「それはダメだ！」

「えつ？」

「あ、いや・・・・・ この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねえんだ」

「・・・・・ 兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」

「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」

「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません」

そう言われてもこっちも困る。

墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そつと洋一は必死になつた。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かつた。

「兄貴・・・・・ 彼女とかではなくて、何か妙なことになつてるんじやないですか？」

彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。

「え、妙なことって？」

「病気とか」

おしい。半分くらい当たつている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけど

「何か心配事でもあるんじゃないですか？」

「ないつてそれ。ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」

「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ? あれだし」

「それにしては声が微妙に震えておられますか?」

「おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だつたが、じつと洋一は耐えた。

シンには使いたくなかったが・ . . . しかたがねえ、
一代田パワーで行くしかない

ドスの効いた声で言った。

「おう、シン。てめえ一代田の言ひつけうたがつてんのか? 四の五
のいわすに言ひこと聞けや!」

「・ 申し訳ありません」

「今から事務所に行く。おまえはそこで待つて」

わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればかりはしかたがない。

洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入つていったのは午後5時だった。

シンと顔を合わせるのは気まずかつたが、そこは彼も付き人。

しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、一、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終えると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。

責任はあるが、はっきり言ってメチャクチャ樂勝のお仕事内容である。

まあこのポジションに上がるまでが大変なのが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。

普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでいるようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかつた。

前も、そしてあの時まで、ずっと。

だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクチェアに深く身を沈め、あいに手をあてて、アンニコイな表情で洋一は考え出した。

-----まさかあんな世界があつたとは、まったく知らなかつたぜ

男である時とはまったく違う、見られることでの快感。

女性の物を身に付けることでの開放感。

そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるっていたのだが、昨夜は違つた。

躊躇い無く放つた前蹴りで碎いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうつとりとした。

また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになつて、はつと口を開じる。

変態を音速で通り越して、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。

- - - - - でも、ついに女装で外に出てしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃ 恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫び声になつて口を手で押える。心臓が1~6ペースで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。

一般人なら茨の道くらいだらうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。

しかもその段数は、絞首台へと上がる13階段より短いと思われた。じんわりと嫌な汗が脇の下を伝づ。

しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まつてくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。

- - - - - 仕事もう終わったんでしょう？ 行こうよこれから。ほら、すぐに。まだ暗くなつてないからドッキドキもんだよー！ 洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。

- - - - - はああああ、もあたまんないっ！
がつくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなつていたのだろう。自分をじつと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。

二代目の影としてひつそりと壁の花と化しながら、シンはずつといき兄貴のことを観察していた。

- - - - 兄貴には絶対に何か困っていることがある！

忠実な付き人は今、そう確信した。

シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

その日、玲は通つてゐる女子高で奇妙な噂を耳にした。

放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残つておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。

また彼氏とかの話だらうとは思つたが、新聞部平部員……玲の記者本能がつが実は部長を影であやつる真の支配者……玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すんごいの見ちゃつたあ」

「なによ、またしようもないことでしょ？」

「ちがうつてば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし」

「はあ？ それってアニメかなんかの話？」

「だーから、ちがうつて！ リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいつて、そんで2時くらいだつたかな、アーケードの裏を通つて帰つてたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思つてたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだつたんだけどね。まきこまれんのイヤだつたから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやつたのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーッて逃げ出していなくなつちゃつたの」

「それって、メイドさんがなんかやつたわけ？」

「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうつて思つて、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たところで、ハルオさんとのチームが走ってきて

「うわっ、あのタチ悪い人！」

「そそつ。たぶんあれはあの子さうつてなんかする氣だつたんじやないかなあ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃつたの」

聞かせている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めちゃくちゃ強いんだって、それが。たぶん空手か拳法だねあれば。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思つ。で、全員やつつけちゃつて、そのうちヤツちゃんまで出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。ヤツけやん出でてきたところでメイドさん逃げちゃつておしまい」

「ふーん・・・まあ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、「ヤーヤ」と笑つて立上がりると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それいちがうつて、マジ話なんだつてばー！」

しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて一人を見送つて、玲は考えた。

「ほんとかな？ たしかあの子、漫画描いてるつていつてたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐつてみるかなつ机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。

午後10時。

自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになつてゐる店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入つていつては、ネタになりそつなのを物色した。

高校に入つてすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合つて、雑誌作りの真似事をするようになつた。

そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助つ入ライターとして、編集長の覚えも高かつた。この仕事を手伝いだして知り合つた人たちも、活潑で妙に人懐っこいこの娘のことを、子ども扱いせずにかまつてやり、たさいな街の情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびとした足取りでその健康的な身体を運んでゆく。

あちこちに顔を出す内に、あつといふ間に日付が変わつて、玲は少しあわてた。

- - - - やばっ！ そろそろアーケードの方にいかなきゅ

広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言つと、玲は急いで表に出た。

アーケードへと早足で歩きながら、さつきスポーツバーのマスターに聞いた話を思い出していた。

そこマスターが、野次馬としてメイドさんを叩撃したと言つたのだ。

「いやあ、凄かつたよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハーフかと思つたくらい綺麗な顔してんのに、木刀持つて男をメッタメタにしちゃつてさあ。あれって絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなあ。行つてみたいなあ、俺
思い出す内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。

- - - - 空手に拳法。おまけに剣道ねえ・・・・・ おもしろ
いじゃ ないつ !

この平和な地方都市では、10年に一度あるかないかというネタだ。
話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい
波を起こせるかもしれない。

自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になつて、
玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。

肩から下げるバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入つて
いるのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

午前1時。

人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めぼしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。

「あ、せめて酒が見つかってりや、ちつとは飢えもしのげるつていうのによオ・・・・・・」

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルッと身を震わせたその時、前を通り過ぎよつとしていた足音が止まつた。

すわつホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバッと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわあ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たつて下に落ちる。

次に、ガチャンとガラスの触れ合づ音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなつてきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しさは温まると思います。どうか氣を落とさず。きっと楽しいことがありますよ・・・・・・」

地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声がした。

まだ固まつている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。

そつと目を開けて、自分の身体に当たつた物を手にとつてみると、

それはあたりめの袋。

暗闇で見えなかつたが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き糸おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まつた袋があつたのだ。

なんだかわけがわからなかつたが、危険は無いと語った辰さんが、おつかなびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去つて行く、派手な後姿が見えた。

真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繡で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。

左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。

やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、「己の足を殴つてあの部屋に行へのを止めようとした。だが、ただ痛かつただけで、足は普通に母のマンショングアをくぐつていた。

今度は、手を押えて女装を止めた。

しかし、気が抜けて鼻をほじつた瞬間に、女装が始まってしまった。せめて部屋の中で我慢しよう試みたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついつかり傍にあつた酒を飲んでしまって、全ては終わつた。

----- そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持つていつてあげよつ！

そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。

差し入れが、あたりめや酒だったのは、かけらほど残っていた男と

しての本能がチョイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によつて、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だといつのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化しているこの男はいったいなんなのだ。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振つて - - - - 今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々とだつたが - - - 中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行こうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。やがて行く道が決まったのか、優雅に扇子を仕舞いつゝ、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りでうたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キヤツチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。

やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。

信号待ちをしながら考える。

----- やっぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？

考えている内にパッとシグナルが青に変わった。

くるっとり。ターンすると、玲は右へと足を向ける。

繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのようだ。

タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。

この国道は、さきほど玲が渡らなかつた交差点から、彼が初めて出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしつている。昨夜、洋一が暴れた国道とつながつていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。

この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。

それでも彼の姿は人目を惹き、醉客から好奇の視線がそそがれた。

自分を見つめる者に、嫣然とした微笑で洋一はこたえている。

その笑顔を見て、ある男は鼻を伸ばし、ある若者は実らぬ恋に落ち、あるおとうさんは、恍惚のあまり家族土産の寿司の折り詰めを道におっことしてばら撒いた。

それを見て、洋一の快感ボルテージはどうどんと上がつてゆく。

- - - - - キツモチイイ!!

まさか自分を探している不図き者がいるとは夢にも思わない彼は、こみ上げてくる心地よさを隠しきれずに、甘い吐息をつきながらゆっくりと歩いてゆく。

だから、普段の洋一ならすぐに気づいていたはずの視線を察知してこなつていた。

ちょうど彼の100メートル後方。

奇しくも洋一の組が経営する高利回り金融の看板の陰から、熱い視線でこちらをうかがっている男がいた。

「まさか兄貴がこんなことになっていたとは・・・・」
頬を赤らめながら洋一の背中を見ていたのは、口調が示すとおり、忠実な付き人、冴島 心であった。

シンの尾行は、洋一が事務所を出たところからもう始まっていた。彼の追跡がまったくバレていないのは、洋一の脳容量の99%を女装が占めている証である。

シンは始め、知らないマンションへと入つてゆく洋一を見て、やはり新しい彼女のところだったかと思ったが、やがて出てきた兄貴の姿を見て、何事にも動じない彼が持っていたカフュラテのカップをボトリと取り落とした。

ちなみにシンは酒も好きだったが、甘い物はもっと好きだった。ドクドクと流れ出す甘つたるい香りに囲まれながら、シンは己の目

を疑い、何度も何度もこすつて確認した。そのために田が真っ赤になつた。

----- 間違いない、兄貴だ・・・・ 姿形が変わつても、俺が兄貴を見まちがつはずがない

そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実に、シンは身体が震えてくるのを感じた。

だが、全てはちゃんと見廻けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけってきたのだつた。

そうやつてついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。

----- おや、まだ身体が震えている。もう落ち着いているはずなのになぜ？

そいついえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。

しばらく変調を不審に思つていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入つた。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」

ある国の原住民をおもわせるマイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。

「牛島さん、こいつス！俺ら襲つてきた女は」

ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそつわせやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。

脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのは「」いつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかしげて考え込んだ。

が、やっぱり思い出せないので、ロンリコをぐいっと一口飲む。そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるよう身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。

身長168cmの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。

短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張つた顔にはいかつい鬚がたくわえてあった。

「」つい身体と相まつて、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。凄むわけではないが、やる気満々という空氣を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。

だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。

よく見ると、目は厳しままだが大きく見開かれていて、口が〇の字を作っている。

おどろいている表情だった。

そのうち、「」つい身体がブルブルと震え始めた。

手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでもやってしまわないの?」といつ非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。

声は渋いバリトンであった。

「か、かわいい」

「えつ？」

ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。

「つ、つきあつてください、ぼくと」

「マジ?」

また一人が同時に声をあげた。

彼らの思惑と180°。違う展開についてゆけなことづだ。

「ひとめ惚れなんです、お願ひしますー」

もう一人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシリフに戻った。

野獣のような男にいきなりカミングアウトされても-----たとえイケメンだったとしても同じだらうが-----気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一步前に出る。さすがの洋一これには半歩トがらずをえない。

「ど、ドライブにきませんか?」

「・・・・・・イヤ」

「じゃ、飲みにでも」

「・・・・・・ムリ」

「それではちよこつとだけお茶でも
「・・・・・・てかウザい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。

殴り飛ばすわけにもゆかず、下がる洋一。

だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。

チヤイナエレスのスリットが割れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上くとあげられるのと、その足の奥にある物を。

牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にピンヒールがめり込んだ。

直線から鋭く真横に飛ぶ、必殺の回し蹴りだ。

あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思われたが・・

御はやはり体格過りの獵者であつた

それどころか顔はまだ笑つたままだつた。

牛島の手が、まるで愛おしこものに触れるよつてそつと足首を捕ら

え
た。

その感触に ヒツと洋一が悲鳴をあげた

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出

七

その目の前で、洋一の身体が華麗に空を舞った。

「变形真空飛び膝蹴り！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。

モロに決まつた膝に牛島が鼻血を噴出すると、その隙に掴まれた足をはずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫っスか！」

そう言って近寄ってきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、

牛島は叫んだ。

「逃がさん！ おまえは俺の女だあ！」

その言葉にかつとなつたシンが、牛島に走り寄ると思いつきり拳を顎にたたきつけた。

これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかまわず、シンはマイ兄貴の後を追つて走る。

だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせつて闇雲に路地裏へと踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶつ倒れている彼氏と牛島を見下ろしながら、何が起こつたのか理解できずに呆然とするのだった。

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。

その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走つただろう。

もう追つてはこれないだろうと立ち止まるが、荒い息を整えつつ、れいきの出来事をファイードバックした。

- - - - うはあ、久々に男に迫られてビビッたあ！ でも会つて10秒で好きではないよねえ、歌の文句やマンガじゃないんだし

幼少期から青年期までに自分に言ひ寄つてきた男どもと牛島がオーバーラップして、洋一はうづうと顔をしかめた。

それ以上おもいだすのは辞めこじて、ロンリコを「ぐぐぐ」と飲み干す。

煙草が吸いたくなつてきた。

だが全て部屋に置いてきてしまつていたし、さすがにロンビニへ買ひに行くのは、わずかに残つてゐる理性が止めてと言つてゐる。

- - - - 明日からはバッグ持つて出よつとつ

この男、もうためらい無く女装お出かけを口課にしようとしている。人生のがけつぶちに爪先立ちしていることを、洋一はすつかり忘れてしまつていた。

しかたがない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと彼は歩き出した。すぐにタクシーがたくさん並んでいる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。

この道をまっすぐ西へ行けば、左手にさつき出ってきた地下街の入り

口がある。

洋一は空になつた酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。

その時・・・

「みつけたあ！」

野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハアハア肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。

恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまつたらしい。

絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。

道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まつていたが、牛島が間合いに入つたのを見てさつと車道に飛び出すると、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。

「絶対に逃がさん！」

牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。

突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。

いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかつてきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。ホームレスへの差し入れと呑わさつて、これは女装状態での一現象と言えるだろう。

追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひょこっと女の子が出てきて、モロに一人がぶつかる。

ヒールを軸に洋一はかかしのよう回って吹っ飛び、女の子はどうしんと尻餅をついた。

「痛つ！」

「ごめんなさい！」

シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上ると、女の子の出できた方へと身をひるがえして走り去る。こっちもなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクッとすぐみあがつた。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。

「どつちいった？ チヤイナの人どつちいった？」

「あ、あつち・・・・・」

その迫力に負けて、つい女の子が去つていった方向を指差すと、スチームのような鼻息を吐いて、大男はそつちにむかって駆け出した。数秒、女の子は唖然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかともうひと、大男の後を追つて走り出した。

-----いつもメイドとは限らない。さつきのが噂の人だ！

記者のカンがそう告げている。

カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女子。

もうおわかりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。

アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。

次に熊、そして少女。もとい、洋一、牛島、玲だ。

三人の姿は、まるでスクラップティックな映画のシーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。

「いや、お前を一人で家に住んでいたりしないで」とイサギーは

コメティを演じながら駆ける二人の後ろでは、真剣な表情をしてバッグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あつ」

突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもうと、アスファルトの上を転がつた。

彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。
肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ち
ふさがる。

「 もう行かましょ。」

あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄つてくる。その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。

だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「セリの町ぞうて… 影になつてて『らなー』」

「えつ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面ストレス
しまで沈んだかとおもふと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。
だが洋一は、瞬時に牛島の懷に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底
突きを放つたのだ。

拳での打撃と違つて、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。
牛島の目がぐるりと裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿
が玲の前にあらわになつた。

- - - - チヤンスッ！

構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白
く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、
チヤイナの女。

玲は「チャンス」ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を
見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終
を見ていたシンがつぶやく。

「玲・・・・なんでおまえが・・・・・・」

湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となつ
て動きを止めたのだった。

牛島騒動からじばりくたつたある日。

いつも通りに事務所にやつてきた洋一は、デスクに陣取つてゆつたりとシンの淹れてくれた紅茶を楽しんでいた。

あの騒動の翌日、持病の痔が急に悪化した父・義隆の代参として神戸に行つていた洋一は、ひさしぶりに女装ができるとワクワクしている。

ひさしぶりといつてもわずか一週間なのだが。

----- 今夜はなに着よつかなあ。メイド、チャイナときてるから、次も定番の和服？ いやでも、和服は髪をアップにしなきや決まんないし・・・・・・

そんなことを考へてゐる田の前で、お盆を片手に、シンが沈鬱な表情でたたずんでいる。

「おうシン、どした。なんか話でもあんのか？」

「いえ・・・・・別にありません。失礼します」

表情を消してシンは、いつもの丁寧な礼をして部屋を出て行つた。

「なんだあいつ・・・・・妙な顔してたな」

そういうぶかしがる洋一が、ティータイムを再開しようとカップに目を向けたとき、デスクの先、ちょうど入り口との間の床に紙が一枚落ちているのが見えた。

何気なく立ちあがつて手にとつてみると、それは毎週この街で発行されているタウン情報誌だつた。

シンが落としていったのかと思い、興味がでて中に田を通じてみると、ほとんどが店舗のPRやクーポン券で占められてゐる、どこにでもあるパンフレット風の冊子であつた。

紅茶を口に運びながら、何の気なしに後のページの占いなどを見ていたが、つまらないのでもう一度パラパラとめくつて捨てようとしたとき、大きなおり文句とスナップ写真が田に留まり広げてみた。

その途端、洋一の口からダラダラと紅茶がこぼれだした。

「WANTED！

ワルと戦う 戰闘コスプレお

姉様！

大きなゴシック体でそう書かれた下には、スリットから白い足を覗かせて駆け去る、真紅のチャイナドレス姿の自分がいた。

そのまた下に小さな活字で、洋一がこれまでに起こしてきた事柄が克明に記事として書いてあり、末尾の言葉はこう結ばれていた。

「「」の女性の情報を編集部では求めています。それでなうわさでもOK！電話・FAX・メール等でお送りください」

ジノリのティーカップを持つ手が震えてくるのを感じながら、洋一は口中の紅茶を全部吐き出してそこに立ち直った。

「玲ちゃんす、ごよ反響が！こんなになるとは思わなかつたな俺」「ねつ、あたしの言った通りでしょ？ 絶対にこれ当たるって」

送られてきたお姉様情報のメールの数を見て、玲は得意そうに胸をそらせると、タウン情報の記者にそういった。

彼女の口論見どおり、平和な街の退屈に飽きていた人々から、たくさんの戦闘お姉様に対する有象無象の情報が送られてきた。その内容はどれも玲の集めた情報の域を出ないものだつたが、自分の記事が大きな反響を呼んで、彼女の心はワクワクとはずんでいた。

「続報も頼むよ、玲ちゃん」

記者は笑顔でそういうと、またかかつてきたお姉様情報の電話へと対応しはじめた。

「はい、まかせといて！」

そう元気よくこたえたとき、ポケットの中でケータイが振動した。見ると兄からの着信である。

ピッヒボタンを押してでた。

「兄ちゃんめずらしいね、自分からかけてくるなんて」

「・・・玲、ひさしぶりだな」

彼女の耳に爽やかなアルトの声が聞こえてきた。

「どしたの、なんかあつた？」

「いや、これから会えないか？」

「うん、いいけど・・・どしたの？玲ちゃんから電話で会おうなんて、なんか不思議」「

「会ったときに話す。今どこにいる？」

「タウン情報の編集部。兄ちゃんには言つてなかつたけど、あたしライターやってんだよ。さつきもさあ・・・」「

「知ってる。じゃあ今からいところで待つてるから」

玲の言葉を途中でさえぎると、兄は編集部近くにある喫茶店の場所を彼女に伝えてから電話を切った。

いつもと違う兄の態度に玲は首をかしげたが、まあ会えばわかるよ

ねと、編集部の入つてゐるビルを出ると、軽い足取りで歩き出した。

待ち合わせの店へと行きながら、兄にも戦闘お姉様のことを聞いてみようと考えていたとき、ふと気がついた。

- - - - あれ？ あたしがライターやってるの知ってるっていつてたけど、なんでかな？

玲の親でも知らないことを、家を出でいる兄が知つていたというのがおかしかつたが、人大つぴらに言えない職業だからどこができるのかもと軽く思いなおして、早足で歩道を歩き出した。

その夜、洋一は母のマンションでうなだれて考え込んでいた。

・・・・・ どう考へてもマズいよね、また女装で街に出るのは・・・
・・・・・

ため息を一つついて、テキーラのグラスを傾ける。
だが、今夜も彼はバツチリ女装していた。

青と白を基調に、胸元に豪華にフリルをあしらつたブラウス。パンツで大きく膨らませたフレアースカート。

首には艶脂色のリボンタイを締めて、不思議の国のアリス風メイドであった。

だがそれだけではない。

今夜の彼の頭の上には、なんとネコ耳カチューシャが装着されていたのだ。

そのなんとも言えぬ困った空気を醸し出している姿は、もはや女装などと簡単にくくれないほど複雑怪奇で、まさに「変態!」としか形容しようがない。

トドメはそばに置かれてある、手持ちの小さなトートバッグだった。中味は煙草とケータイ。

「出る氣満々やないかい、ワレ!」と読者諸兄は突っ込まれるだろうが、まずは彼の言い訳も聞いてやって欲しい。

心の病だかなんだかわからないが、ここで女装お出かけを辞めてしまつと、ストレスで稼業の方にも影響が出てきて、きっととんでもないヘマをやらかしてしまうだろ?。

とこうか、そもそもまず出てゆくことを止めるのが不可能に近い。

しかしこれもまた不思議だが、なぜか俺はタウン誌にマークされている。

だから目立つ格好でのお出かけはもう辞めよ。」

地味な〇しがホステスっぽい格好でならマークもかわせると思つから、これからはそれで我慢する」とこじよつ。

「メント不能なムチャクチャな理論だったが、いちおつ結論りしきものが出て、洋一は立ち上がるときッと顔を上げて叫んだ。

「よし、だから今夜は最後のメイドナイトだ！」

バッグを手にすると、洋一は玄関へと小走りで駆け、用意しておいた黒い厚底のシューズに足を通して、ドアを勢いよく開けて外へと飛び出していった。

まるつきつ正常な判断ができなくなっている洋一から少し時間を戻そつ。

太陽が沈みかけ、街が紫色に染まる夕刻。

待ち合わせの喫茶店へと着いた玲は、目立たない奥まつたボックス席に座っている兄の姿を見つけて手を振った。

軽くうなづいて答える兄。

もつね氣づきかとおもつが、それは紅椿一家一代目付きのシンだつた。

「わあ、兄ちゃんの顔みんのひさしぶりだあ。元気だつた？」

にこやかに笑いながら玲はシンの前の席に座ると、注文をとりにきたボーキにミルクティーをオーダーする。

「ああ元気だ。すまないな、急に呼び出したりして」

「ううん、別にいいけど。それよりどしたの？あたしに話なんて初めてじやん」

無邪気に話しかけてくる妹から目をはずすと、シンは言ひよじんで黙り込む。

静寂が訪れ、しばらくは店内を流れる小粋なジャズだけが、二人の間に漂っていた。

ミルクティーが届くまでたっぷりと黙り込んだあと、おもむろにシンは切り出した。

「今週のタウン誌の記事を書いたのは玲か？」

なぜ知っているのかと玲はいぶかしながら、「べりと一口ミルクティーを飲むと、軽くうなづいた。

「うん、そうだけど。なんで兄ちゃん知つてんの？」

「あの記事に載つていた人をこれからも探すのか？」

質問に質問が返ってきた。

いつもの兄とは違つ、性急な物言いにとまどいながら玲が答える。

「うん。さつきも編集部に顔出したらすんごい反響でね、電話やメールもバンバン来てて。記者の人にも続きよろしくって言われちやつてさ……」

「それ、やめてくれないか？」

言葉をさえぎられて、おどろいて玲はシンの顔を見つめる。

玲に対して優しい笑みを絶やさなかつたシンが、真剣な目をして自分を見ている。

その表情で気がついた。

「あの人つて兄ちゃんの知つてる人なんだ……」

今度はシンがおどろいた顔になり、息を飲んで皿をそむかせる。

「兄ちゃんの彼女が好きな人なの？」

玲の問いかけに、兄の肩が小さく揺れた。

「やっぱそうなんだ。それで……」

「ちがうっ！ あの人はそんなのじゃない！」

おさえた声音だったが、玲がビクッとしてしまったほど強烈に否定の声だった。

またうつむいてしまった兄の姿を見つめながら、玲は思つ。

「…………ふーん…………でも兄ちゃん。ちがうつてこつても

その仕草じゃバレバレだよ

まあその辺はあまり刺激しないようにじょじょに冷静な判断を下すと、玲は話を進めました。

「それはいいとして。知ってる人なのはほんとでしょ？ で、なにか事情があつて正体がバレると困る人」

そういうたとき、一瞬だけれどシンの口元がイーッとゆがんだのを玲は見逃さなかつた。

片手をつぶつて、少し上目遣いに兄を観察しながら、カップに口をつける。

「兄ちゃん言いたくないんだろうけど、その事情を話してくれないとこいつも困るわけ。これでもちゃんとお金もらって記事書いてるの、あたし。だから高校生だからといっていかげんな仕事はできないの。兄ちゃんやつちゃんだから、仕事のケジメってよくわかつてるよね？」

理詰めできた妹の言葉に、シンは額に汗が浮かんでくるのを感じた。
「…………」「、こればっかりは言えない…………でも話さないと、この強情な妹は絶対に兄貴を追うのを止めないだろう
パラドクスな問題に、シンは苦渋に満ちた顔をした。

そんな兄の姿を、玲はまるで実験を見守る科学者のような目で見ながら、また話し始める。

「それにライターとして聞くわけだから、秘守義務ははちゃんと守るし、もちろん興味本位とかはいっさいなしよ。その人の生活に影響が出そしたら、記者の人には話して止めることもできるし」

はつとシンが顔をあげる。

その目に希望の光を見て取つて、あと一押しと、玲は一気にたたみかけた。

「それに・・・・・・」

「そ、それに？」

「兄ちゃんあたしが信用できないわけ？兄ちゃんヤクザになつてあたしやみんなに迷惑かけたけど、あたしが兄ちゃんに迷惑かけたことある？」

「ない・・・・・・」

「なら話しなさいー悪こよひでひましないから」

肉親の情と兄の罪に訴えた、本職のヤクザも顔負けの、アメとムチの使い分けが絶妙な交渉であつた。

シンより妹の方がその道にむいているのかもしれない。

証拠の凶器を田の前に置かれた容疑者のよつこ、がつくつとシンは肩を落としてうなだれた。

玲が田でもう一度うながすと、兄は一代田の女装のことをぽつぽつと語り始めたのだった。

そして時はまた戻つて……

マンションのエントランスから出てきた洋一を見て、シンはうつとうめいた。

「あ、兄貴！ それはいつたいどんなお姿で……！？」

「アリス風メイドね。よっぽど自信ないと決まんない服だからあんまし一般的じゃないけど。てか、あのネコ耳が意味不明」

「そうじゃなくて！ なんであんなお姿に……それにちやんとあの冊子を落として警告したのになぜ」

「知らないよそんなの。好きだからでしょ、れつと。ああいつのは自分じや止めらんないもんなの！ それより兄ちゃん、いくよ」
すっかり兄妹の立場が逆転していたが、そのことに気づかないシンは、玲の後について洋一の追跡を開始した。

その後、洗いやらい打ち明けた兄に妹は言った。

「ふーん、そういう事情ならこっちも考えるけど……で
も兄ちゃん。あたしが記事にしなくっても、このままの人があの格好で出歩いてたら、絶対に噂はおつきくなるよ。もう火はついたらやつてるわけだし。その二代目だっけ？ その人にちゃんと話して辞めさせる方が先じゃない？」

「それはできない！ つらい稼業の息抜きで楽しんでらっしゃる行為を舎弟に見られて説教されたなんてことになつたら、もう兄貴のメ

ンツは丸つぶれ。俺も組に、いやあの人のおそばにいられなくなってしまう」「へえー、いろいろとめんどいのねえ、ヤっちゃんも」

火をつけたのは自分なのに、まるつきり同情していない口調で玲は
そういうて、冷えてしまったミルクティーをまずそうに飲む。

そして、うーんと顔を上にあげて考え出した。

「こっちから言えないとなると…………そだ！ あたしがある人に言つてのはどう？」

「えつ」

「もう、にぶいなあ！ だから、あたしがあの人の決定的な瞬間を
捉えてから、出てつてはなすわけ。それならあの人も兄ちゃんもダメージ少ないつしょ？ だつてあたし赤の他人だし」

「そ、そうかなあ？」

「じゃ、ほかにいい方法ある？」

黙り込んだシンを見て、玲は言ったのだ。

「決まりね。今夜から兄ちゃんとあたしであの人を尾行よつ。今度
は必ずチャンスつかんでやる！」

「おい。それなんか意味ちがつてないか？」

兄の言葉はもう妹には届いていなかつた。

そして兄妹は今夜、洋一の後をつけているのだ。

「また街に出て行かれるのだろうか」

「うーん、そうだとしたらそうと一キテるわね、あの人」

そう話す一人の前、100メートルほど先で、チラリチラリと青白いスカートが揺れている。

その光景に「クツ」とつばを飲み込むシンを見て、玲は目をいやそうに細めていった。

「てか兄ちゃん。ほんとはあの人のこと好きなんじゃないんでしょ?」

「バカ! 兄貴は男だぞ」

「ただけど・・・・なんか兄ちゃんの反応がおかしいから」

「俺はノーマルだ。その気はない」

玲は、ふーんとまだ納得せずうなりをあげていたが、洋一の姿が角を曲がって消えたので、いそいで闇を詰めて走った。

ぼくぼくとアリスマメイド洋一は夜道を歩いてゆく。

その足は繁華街とは別の方へと進んでいて、少しだけシンは安心した。

やがて洋一は、街の中心から少しはずれた市民公園へとたどり着いた。

入り口の逆ロの字の柵のあいだを通りて、彼の姿は闇の中へと消えてゆく。

深夜の公園なので人影はない。

ここでは騒動など起るはずがないとシンが胸をなでおろしたとき、洋一の目の前にバッと黒い影が現れたのが見えた。

何か一言二言はなす声が聞こえてきて、シンが前に出ようとしたら、

影がものすごい勢いで真横に吹っ飛んで倒れた。

それを見て唖然としたが、当の洋一は、もう後ろも見ずに鼻歌をうたいながら歩き出している。

二人にはよく見えなかつたのだが、黒い影は痴漢で、隠れて獲物を待つていたところ、おいしそうなメイドさんが現れたのでこれはラッキーと飛びついて、したたかに洋一に殴られたのだつた。凶器は、左手に持つたテキーラの瓶であつた。

なんだかよくわからないが、シンはなぜか用意していたロープで男を縛り上げて転がし、玲が手帳に「この人変質者でーす！」と書いたページを破つて背中に貼り付けた。

その作業を一分とかけずに終わらせて、また尾行を開始する。

アリス洋一が公園を出てゆくまでの一時間の間にその被害者は三人にもおび、深夜の公園でのコスプレ姿がいかに危険であるかを知らしめた。

どいつも一撃で仕留められていたので、玲が出てゆく暇も無かつた。

洋一は公園を後にすると、トコトコと歩いて、24時間営業の大きなリカーショップへと入つていった。

どうやら酒が切れたらしい。

面が割れているシンは出入り口の影に待機して、玲が中に入った。彼女は大胆にも、たくさんの酒が並ぶ棚を一つ一つ吟味している洋一の後ろまで近寄つていつて観察した。

-----メイクがイマイチね。明かりの真下でよく見たら、男ってわかっちゃうかも

しかしども30男でしかもヤクザには見えないな、などと思ひながら、ゆっくりと後ろを通り過ぎた。

チラッとカウンターの方を見ると、レジに立っている男が、好色そ
うな顔をほこりばせてメイドさんを見ているのがわかり、ムツとす
る。

- - - - なんでかわいい女の子のあたしじやなくて、女装男の
方を見るかな、もう！ メイド服に騙されちゃって・・・・・こ
れだから男はバカね

世の男性にはあまりに酷い感想をつぶやくと、玲はまた洋一の方を
見た。

彼はバー・ボンの銘酒・ブッカーズを手にしてレジへむかっていた。
そして支払いを済ませて店を出てゆく。
店員の顔は最後までほころんだままで、まったく洋一の正体には気
がついていないようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587y/>

女装天女！

2011年11月24日18時47分発行